

## 第5回「新鋭俳句賞」候補者一覧

2021.10.24

番号	題	俳号	所属結社	会員非会員	男女	年齢	住所
1	落葉松霧氷	伊藤 幹哲	馬酔木	会員	男	33	栃木県
2	孤村記	玉木 たまね	楽園	非会員	女	49	東京都
3	大樹	金澤 諒和	澤	会員	男	49	大分県
4	膜	小関 菜都子	棕	会員	女	47	大阪府
5	人魚の爪	石井 静	玉梓	会員	男	47	奈良県
6	家族	木幡 忠文	無所属	非会員	男	42	東京都
7	伸び代	森下 哉美	玉梓	会員	女	45	神奈川県
8	一族	谷村 行海	街・むじな	会員	男	26	神奈川県
9	水の音	森 瑞穂	香雨	会員	女	49	岐阜県
10	しぐれ	宮崎 淳	香雨	会員	男	40	埼玉県
11	冥王星	堀木 基之	百鳥	会員	男	48	愛知県
12	号泣の予感	笠原 小百合	田	会員	女	37	東京都
13	向うがは	山田 かしら	無所属	非会員	女	49	埼玉県
14	子とみる季節	森 雅紀	ひいらぎ	会員	男	44	静岡県
15	週末農	勝俣 文子	藍生	会員	女	42	静岡県
16	くもりのち	上野 犀行	田	会員	男	48	神奈川県

第5回 新鋭俳句賞  
候補作品集

2021.10

公益社団法人 俳人協会

第5回 新鋭俳句賞 候補作品集

【目次】 作品の字体・仮名遣いは応募原稿通りとしてあります。

No.	題	ページ	当初受付番号
1	落葉松霧氷	3	21
2	孤村記	4	16
3	大樹	5	63
4	膜	6	30
5	人魚の爪	7	2
6	家族	8	4
7	伸び代	9	14
8	一族	10	60
9	水の音	11	9
10	しぐれ	12	11
11	冥王星	13	31
12	号泣の予感	14	57
13	向うがは	15	7
14	子とゐる季節	16	33
15	週末農	17	53
16	くもりのち	18	65

第5回新鋭俳句賞候補作品一覧

2021/09

1位5点 2位4点 3位3点 4位2点 5位1点 で評価

当初NO	題	藺草慶子	小島 健	西山 睦	堀本裕樹	計
1	21	落葉松霧氷	5	5	4	14
2	16	孤村記		4	4	8
3	63	大樹	3		5	8
4	30	膜			5	5
5	2	人魚の爪	4			4
6	4	家族		3		3
7	14	伸び代			3	3
8	60	一族			3	3
9	9	水の音			2	2
10	11	しぐれ		2		2
11	31	冥王星			2	2
12	57	号泣の予感	2			2
13	7	向うがは		1		1
14	33	子とゐる季節			1	1
15	53	週末農			1	1
16	65	くもりのち	1			1

落葉松霧氷

みづうみに雪降りそむる初湯かな

立春や杉の根方に射すひかり

明け方の鳥啼きのぼる班雪山

立子忌の夜空滴るごとくなり

船笛の鳥を離るる春休

紺青に昏るる沖あり初燕

花散るや己がひかりを追ふやうに

花檉のにはふ真闇となりにけり

マロニエの葉かけ踏みゆく立夏かな

花桐や黎明に聳つ双耳峰

てんと虫子の掌に微熱あり

上潮の打つ石垣や花梯梧

沖雲の波立つ夜なり蚊遣香

虚空より碧きみづうみ罌粟咲けり

太々と黒々と干す昆布かな

溪底に瀬音激ちぬ朴の花

笹舟の流るる夏至の片明り

揚舟に日の照り返す立葵

水打つて人待つ心定まれり

白雲に白雲触るる山開

溜息のごとく風来てアマリリス

水澄むや枝さしかはす棗の樹

遠嶺より風立つ鷹の渡りかな

火口湖を夜雲おほひぬ十三夜

峡空に白き山聳つ枯芙蓉

マフラーに朝日の匂ひふくらみぬ

月明の山頂に雪炎立つなり

暁闇の鶴唳胸に降りにけり

凍滝の中ひびきあふ水音あり

銀環を背負ふ落葉松霧氷かな

湧き水の零るるごとく子蛇落つ  
 岩魚焼く山椒味を腸わたとして  
 蚊に尋ぬわたくしの血はまだ赤か  
 山神の寢息のごとき濃霧かな  
 鹿泳ぐ湖うみの薄皮剥ぐやうに  
 目を縦に回し牡鹿や草食める  
 止め刺しの刃に蒼穹や鹿の眼にも  
 鼬吊る喰はれし鶏とりの首の前  
 剥製に見張られてゐる狩の宿  
 くつくつと咲む大鍋の猪頭ししあたま  
 どぶろくに今宵つま先から眠る  
 無口なる獵夫や犬語堪能も  
 この道は姥捨の道けふは雪  
 注連繩にぬかづき吾も獵犬も  
 念仏を白く吐き出す獵夫かな  
 ゴドー待つやうに二人や狩場の木  
 積みあがる骨呪術めく獵師小屋  
 誰も彼も美しき指獵夫一家  
 熊を撃つ綺麗に死ねるやうに撃つ  
 熊の腹裂く軽トラの腑分け台  
 魂も抜き去り熊の血抜かな  
 影だけを生理にして夕枯野  
 川より上がり細き犬夕焚火  
 仔熊飼ふ母熊撃ちしその夜より  
 血を乾杯す熊鍋に与れば  
 身語りは北の訛りや老獵夫  
 遠吠えの長さに氷柱そだちゆく  
 山眠る仔犬座そばに遊ばせて  
 死化粧めきて孤村の桜隠しかな  
 獣にはなれぬ吾が身や落椿

落第の子に珈琲のただ熱し

少年のグラブは素手ぞ風光る

一つづつ椅子を残して卒業す

話し掛けたくなる空や半仙戯

入学児まづ早起きを褒めらるる

勾玉に水の手触り春の月

遠足の校舎一日眠りたる

子の拳立夏の窓を叩きけり

薫風や額集めて描く地図

水面暮れ水底暮れて初螢

滴りの他は時なき伽藍かな

父の日の父のペン先乾かざる

青梅雨の校舎大樹の香を放つ

帰省子の靴を真中の三和土かな

十薬に夜の雨脚の整ひぬ

大樟の蔭の中なる晩夏かな

吾が頬を撫づる風へと門火焚く

革靴に歩く校庭終戦日

少年に四股名はあらず草相撲

アンカーに競ふ双子や秋の空

靴箱の酸っぱき匂ひ運動会

甘藷抱ふ児の両肘の泥塗れ

立冬の空の深さを言ふ子かな

時雨忌の世界へ開く河口かな

七五三すでに鼻筋確かなる

伐られてはならぬ聖樹となるまでは

去年今年胎児は海を抱きたる

熱爛の教師に明日のありにけり

子守唄忘るる頃の海鼠かな

マスクして抱き合ふ子らよ春隣

蘆の角見んとおのおのよるめきぬ  
どこでも出来る話を春野にて  
つくしんぼ少し曲がりて真直くなる  
点線のごと蝶々のよぎりけり  
太陽の塔の太腕鳥帰る  
黒板にチヨークの膜や春深し  
三度目に閉まる電車のドア薄暑  
洋花の挿され水口祭かな  
青鳶や鳥は出入りをあやまたず  
厨より見ゆる芒種の日暮かな  
抱へたるものと揺れをり女郎蜘蛛  
大皿に大盛りの菜扇風機  
梔子の花けふよりは汚れゆく  
片付けの人入る空家蟬時雨  
奉納の花氷なり濡れに濡れ  
運命をぶら下げしごと花胡桃  
一軒に集ふ自転車夕永し  
家ぬちにも風の道ある盆支度  
かなかなや嫌ひな人は夢に出る  
蜉蝣の息を浅しと思ひけり  
月明やただ叢に開くドア  
従業員用駐輪所銀杏散る  
二月堂供田に稲架の短かり  
手に温くなれば団栗もう要らぬ  
二つづつ柿を渡して女去る  
干柿の古色となつてゆくところ  
陵から陵へ踏む落葉かな  
枯蘆を見る足元も枯れてをり  
毛糸編みはじめ儂きものを編む  
日向から日陰へ落葉掻き終ふる



春浅し秒針光る腕時計

靴音の隙間すきまに草萌ゆる

入学式看板の字の大きさも

春愁の指黒髪をもてあそぶ

苗札にぬたくつてゐる父の筆

その幅に暮れ残りけり春の川

寺の屋根教会の屋根吹流し

終ひには軍手も脱いで草むしる

雑巾がけ終へて跣足の裏も拭く

夏布団掛けしを祖母は気付かざる

持仏堂出でて炎暑に晒さるる

噴水を少し離れて人を待つ

濁りゆくクリームソーダつつきををり

どこからか獣の匂ひ夏の雨

夏の果また深爪をしてしまふ

ぺらぺらの粗品のタオル秋暑し

軟膏の素直に伸びて涼新た

母の名で呼ばれてをりし盆の家

三日月の透けて人魚の爪の色

折り癖の強き古本初時雨

鉄棒に小さき手袋日が沈む

仲直りしよう鯛焼冷めぬ間に

冬うらら半眼をまた閉づる鹿

落つ速さそのまま霰地を走る

温室に充滿したる花の息

道端の氷紙屑閉ぢ込めて

茎の石河原の夢を見てゐるや

大いなる仁王の指紋冬日影

百円の星ひとつ足す聖樹かな

飾吊るこのためだけの釘ならん

子の笑ひ声が遅れて半仙戯  
透明な音して割るる石罅玉  
突き当たるまで風船は昇りゆく  
奴風風から空へ入り静か  
淡雪の中淡雪の影が降り  
肩に散る雪解零の光かな  
手のひらにちらばる色の雛あられ  
春雷の余韻ただよふ草の上  
引く波は素足の下の砂さらふ  
大空に鱗を跳ねたる鯉鱖  
夏空は真青な色で息をして  
炎天に薨の波の真青なる  
陽を絞るやうにたたみて日からかさ  
やはらかく手うちわしたる浴衣かな  
風鈴の音一瞬のもつれかな  
ビルの間のどの夕焼けも違ふ色  
落ちてなほ線香花火の跳ねにけり  
近寄れば風に遠のく踊唄  
月光は夜の伽藍を輝かす  
台風之眼に満月の残りゐて  
真つ白に箸に崩るる新豆腐  
山霧の無音が尾根を下り来る  
今朝貰ふ鉢に秋風はや通ひ  
凧が大樹の影を干切らむと  
波の花ゆるるも飛ぶも波の上  
霜柱潰せば一度きりの音  
一人の音二人の音あり落葉道  
鬼よりも知つたる部屋で鬼やらひ  
静寂をどんとひと突き弓始め  
赤子へとうつり朗らか初笑ひ

伸び代

七色の影ついて来る石鱈玉

好きな句を唱へて歩く蝶の昼

棚一段一年生に空け渡す

つばくらめ昇降口に子ら湧いて

名を変へて川の流るる昭和の日

亀の子に聞いてもらつて九九覚ゆ

立つたままアスパラガスの茹で上がる

やはらかく髪を結んで春惜しむ

武具飾る朝から風の輝く日

毛虫這ふ毛先のひかり散らかして

こどもの日自転車磨く父と子と

葉桜やどこへゆくにも自転車で

風の手と繋ぐ高さに今年竹

卓に立つパイナップルの下ぶくれ

母の日の普段のままの母を撮る

すぐそばに雀来てゐる昼寢覚

純白がいのちのはじめ七変化

梅雨寒やひとり遅れし合羽の子

太陽を抜けられなくて梅雨の蝶

黒南風や作つて壊す紙粘土

組板を響かせて切る夏野菜

髪洗ふ吾子がこさへる泡のつもの

ほうたるの逃げゆく星座ずれてゆく

噴水の止まるや何か言ひたげに

等身の楽器背負ふ子かたつむり

裸足の子床に宿題持ち込んで

どれも少し破けてをりぬ捕虫網

白南風や鳥美しき声を編む

尺蠖の伸び代のある一歩かな

露剥くや子の音読を聞きながら

掌に天道虫の湿り来る  
時計修理帽子の鍔に若葉溜め  
眼の奥に骨透けてゐる熱帯魚  
夏野よりそろばん弾く音一万  
指入れて鯰を誘ふ女かな  
冷蔵庫閉ぢ恋愛の続きする  
熱帯夜むせながら水飲み干しぬ  
味噌汁に知らざる貝や旱星  
行きよりも草いきれ濃し中尊寺  
上巻は秀吉の死や葉鶏頭  
秋空や最中の家紋すぐ毀る  
工務店面接室に猪の首  
秋の園不意に合鍵渡さるる  
王冠の錆の斑や冬近し  
悲しとも旨しともなくきりたんぼ  
祖母役の女優独身寒の雨  
師と呼べば師の顔なさる冬夕焼  
総身に鋭き氷柱仁王像  
熱爛を酌めり互いを疎みつつ  
霜の夜の修正液の流れ出す  
卓球のラリー途切れぬ淑気かな  
噂や明日より開く喫茶店  
ポケットにありし飴舐む夕桜  
身籠らぬ身の重たしや霾ぐもり  
永き日や二口に食ふカツサンド  
有給の刻ながながと雀の子  
夏雨の町に黄色のもの溢る  
ぼつてりとして鹿の子の続きけり  
一族に一人加はり夏料理  
入道雲牛に触れれば肉の圧

パリストアのひつつめ髪や夏来る  
初夏の光をとほす試験管

さくらんぼ含むくちづけならあとで  
薔薇触れて誰も愛してをらぬ指

卯の花腐し羊水はぬるき水

教室に入れぬ生徒走り梅雨

梅雨寒の鎖骨に当たる傘の骨

さみだるる職員会議長引いて

ポケットの小銭のぬくき夜店かな

七月の昇降口に海の砂

短夜を点りて進路指導室

汗ばめる乳房触れたる赤子の手

昼寝より覚めても忘れられぬひと

冷蔵庫小さき单身赴任かな

行く夏の使ひきれざるドル紙幣

星今宵逢瀬はひそやかに叶ふ

初秋のテニスコートに雨の降る

秋冷や白衣のままに理科教師

駅前の放置自転車鳥渡る

長き夜や夫が爪切る音を倦み

教科書の重さのリュック冬木道

セーターの背中に頬を押し当てて

街のにはひの外套を脱ぎにけり

産休の教師へ渡す冬林檎

さへづりやエプロンにあるたたみ皺

桜葉降る淋しさは声にせず

藤棚をくぐり抜けたるベビーカー

息ひそめても春雷の鳴りやまず

これから住まぬ街の灯月朧

春の昼家庭科室に水の音

しぐれ

しぐるるや天よりも地を暗くして  
立ち止まりたれば静寂落葉道  
風呂吹の病癒えたる母の味  
人の世に星を近づけ霜の声  
花束は香をつつしまず暖房車  
その言葉お守りとせむ年忘  
まだ星の残る方へと初鴉  
制服を着るに流儀や初仕事  
どんどの火祝詞の声になほ盛る  
引き返しうぐひす餅を買ひにけり  
春星や買ひたる切手ポケットに  
雨のなか光る雨粒花海棠  
講習の部屋の静けさ春の雨  
狛犬は対なるままや花吹雪  
駅前に変はらぬ花屋春しぐれ  
ネクタイに運の良し悪し朧月  
母の日や畑の愚痴を聞かされて  
雨降りてこそその白なり山法師  
翡翠のおのが光を引きゆけり  
ナイターや上司の言葉借りて野次  
やはらかく地へと空蟬もどしけり  
風鈴や休日の午後さみしうす  
蟬時雨わが心中にゐるごとし  
授かりし大きな手あり原爆忌  
蟬落ちて豊かな腹を見せにけり  
昨夜から同じ音たて秋の雨  
腕組みし歩きてゐたり秋の暮  
たつぷりと光に浸り菊花展  
わが手紙ポストの中に星月夜  
虫しぐれ辞書の上へと眼鏡置き

大鉦をもて寒餅を削ぎにけり  
探梅や水船に顔映りこみ  
梅真白被はるる子の起こされて  
仏間へと春の炬燵を跨ぎけり  
苗札の筆先割れてゐるらしく  
水桶の伏せてありけり花曇り  
舷を寄せ合うてゐる落花かな  
油まじ心中ものを演目に  
夏隣埠頭に足場組まれたる  
初夏や細かき船の設計図  
棧橋の長く伸びたる梅雨入かな  
空梅雨や賽銭箱と太く書き  
賽銭に実梅の添へてありにけり  
橋脚はおほかた水に明易し  
時間貼り出して夏越の祓かな  
大茅の輪少し弛んでゐたりけり  
青柿やラジオ体操ラジオより  
大楠の注連新しく川開き  
凌霄に突つかへ棒のしてありぬ  
俎を濡らしてトマト切りにけり  
半分は枯れてゐる木や日雷  
田の水に落ちたる鼠火花かな  
熱帯魚冷たき水の注がれて  
蜻蛉や高潮提をなほ高く  
水門を通る舟あり草の花  
三人で動かす艇子や秋の晴  
泥炭は草の紅葉となりにけり  
大花野冥王星が近ければ  
観客は草に座りて秋まつり  
猪垣の紐の千切れて飛んでをり

号泣の予感

母となりゐて母の日の母遠し

葉桜やワイン専用紙袋

打球音遠くに昼寝続けをり

出発の合図の手旗立葵

冷房や大樹がビルの中に立ち

海月浮きつづけて海の果つるまで

遠雷や餃子の皮を餡あふれ

未来映れる虹色のサングラス

夏の見慣れぬバスの走る町

水面を叩き楽器となるプール

星を見にゆき夏の灯に帰りつく

風強き雨の日なりき夏館

号泣の予感よサマードレスの夜

鎖場の夏空遠くありにけり

向日葵のみな吾を向くなか走る

打水や怒りをさまりゆけるまで

夫とゐて吾のみ喋るや盆の月

葬列や木犀の香の猛猛し

折込の広告のなき秋の朝

蛇笏忌や川の流るる音絶えず

蠶の雪を払へる装鞍所

書きかけのショートショートや冬堇

鶯の呼び合ふ森を迷ひたり

陽炎の無音ずるずる近づき来

靴下は丸めて靴へ春の浜

坂道を輕輕バレンタインの日

母を追ひ母に隠るる仔馬かな

春泥のなかのわが顔泥塗れ

ふらここを待つてゐる子も揺れてをり

大鋸屑の薫る八十八夜かな



向うがは

ふれあうてゐる肘と肘薄氷

風あげの一人は声の変はり初む

ふつくらと風をふくみて露の臺

姉妹すみれの鉢をひとつづつ

夕空と夜空のあはひ春の星

菜の花や総武全線風の中

ぶらんこで爛漫に飛びこんでゆく

溜鉢の溝の濃みどり蓬餅

硝子戸にふれ春雷にふれてをり

雪柳咲きて銀河の生まれいづ

片や下段片や正眼青嵐

お手玉のやうに蝙蝠かむほり出てきたり

六月をうつろうてゐる青さかな

黎明や星の形に百合ひらく

物干して露台ようそろ風はやし

号泣の迷子氷菓を手ばなさず

明るさや金魚のひれの向うがは

水引の誰にもいはぬ花ざかり

桃の実の音なく剝かれをりにけり

鬘しるがねとなる波頭台風圏

銀の秋刀魚黄金こがねに焼かれけり

股眼鏡して秋天の深き淵

秋の灯を揺らし東大行きのバス

染付の藍の濃淡冬はじめ

神無月杉は天より降るごとく

ひとひらの雪落ちながらくだけけり

寒月や鉄路を叩く鎚の音

不意にゲシュタルト崩壊冬銀河

煮凝うたかたに泡沫のとどまりてをり

坂東の薨の海を冬雀

朝の蟬大地揺さぶり始めけり  
かたまつて浮いてゐるなり七変化  
舟去れば元の風音栗の花  
階段を駆けて白衣の更衣  
妹の水鉄砲は胸に受け  
万緑や神隠しとは死語ならず  
月蝕を仰ぐ縁側みな跣足  
花火待つ大地の熱の冷めやらず  
大空の金の剥落揚花火  
閃光の十字切る雷落ちにけり  
稲妻に向かふほかなき高速路  
鉛筆の音昂ぶれる夜学かな  
秋燕や京は遠ても十八里  
白菊や百寿の末に紅さして  
虫の音の氣遣ひあへる葎かな  
木の実選る片ポケットは姉の分  
長き夜の子に魍魎の出ては消え  
一枚の寝具に四人星月夜  
冬の星我も我もとまた、けり  
寒オリオン天の階大腿に  
寒風やオリオンの肩衰へず  
金粉の書は闇にありクリスマス  
クリスマス鈴の音聞きしことほんと  
ふるさとの三日秒針速きかな  
大寒や木乃伊のごとく指を組み  
一語づつ絵本読む子と春を待つ  
燕の輪舞入れかはり立ちかはり  
解一つありさうでなし朧月  
授与式の最中齒の抜け卒園す  
春光や齒の抜けし子に妖精来

風船の中身を風に返しけり

囀や揺れるピアスのガラス片

隣室の終礼つづく遅日かな

しやぼん玉進路指導の休憩中

パーカーの上にジャージを着る春思

山笑ふポーチより口紅を抜き

軍手投げ自称農女の桜餅

田より出て俗世に入る耕運機

農道の轍V V 日永

花柄の布巾に止まる春蚊かな

思春期の遠浅の夢桜貝

逝く春をブックカバーに差し込みぬ

葉桜や裏門を抜けキッチンカー

脈拍の煩き夏服の首

同僚は親友未満青葉潮

柿若葉ひかりは仏間まで届く

週末の日々縫ひ合はせ田水張る

夕さりの脇腹伸ばし代田搔く

猫の声欄間の陰に燕の子

喪失を崩さぬやうに田を植ゑる

五月女を支へる泥の深きこと

地下足袋濯ぐ両膝は若草に

蝸牛雨の降り始めを知らず

白きあぢさゐ無視といふ弱き意思

面談に父親多し梅雨晴間

十薬にうつすらと血の通ひたる

滝壺に沈みしままの志

音立てて生者と茅の輪くぐりけり

代休のSF小説と日傘

汗つたふデコルテは血管の地図

くもりのち

二階まで吊り上ぐピアノ夏初め  
幅跳びの距離へ巻尺風薫る  
できたての駅のにほひや薄暑光  
ポマーダの髪撫でつけて巴里祭  
立掛けの箒に蜘蛛の罫のかかる  
母の売るジュース団地の夏祭  
蠅取に張り付く蠅と蠅以外  
カード式公衆電話避暑の宿  
持ち帰りたき薔薇園の紅ひとつ  
八月やストローをもて水を飲み  
青空へ運動会の火薬の香  
小鳥来るぐるぐるしまふ電話線  
元町へ夜更かしにゆくインバネス  
山茶花の垣へ江ノ電傾ぎゆく  
昔からある産院や冬ぬくし  
洗剤のキャップに目盛冬の鵞  
十人が振り向く大噓一発  
外套へ港の風やレノンの忌  
参道の半ばにおでん煮るかをり  
猫よけのペットボトルの水こぼる  
穴を掘るだけの工事や冬銀河  
旧正や長き箸もものつかむ  
鎌倉へ列車乗り継ぎ立子の忌  
口づけの距離の金縷梅かをりけり  
教員のふりして母校まで花見  
土踏まずもて踏んでゐる春の泥  
道具箱持ち出し巣箱つくろへり  
けふは午後よりくもりのち春うれひ  
自動車を動かす電気つつじ燃ゆ  
海猫渡る空のいろより透きとほり